山形県 県史だより 第26号

山形県総務部高等教育政策・学事文書課分室 県史資料室

〈特別寄稿〉

県史編さん事業が生んだ半世紀にわたる研究会

― 山形県地域史研究協議会の歩み ―

山形県地域史研究協議会副会長

山内 励

写真 山形県地域史研究協議会設立総会・研究大会のひとこま（県史資料室所蔵）

一 はじめに

山形県における県史編さん事業の過程で誕生した山形県地域史研究協議会が、活動を開始して半世紀の節目を迎えます。昭和五十（一九七五）年に第一回総会・研究大会を開催し、コロナ禍の一年間を除き、毎年、県内各地域に会場を移して大会を開催し、令和七（二〇二五）年七月には、第五十回大会が設立時と同じ天童市で開かれることになっています。

二 山形県の県史編さん事業

戦後、山形県で県史編さん事業が本格的に始まったのは、昭和三十二（一九五七）年度のことです〈第一期〉。戦前の『山形縣史』全四巻が政治史中心であったのに対し、産業、経済、その他の分野の歴史も広く取り上げる意図から、本篇の農業篇刊行が最初に目指されました。一方、歴史研究を進める上で不可欠な資料の収集・調査が進められ、昭和四十七（一九七二）年度までに『山形県史』本篇四巻、資料篇一二巻が刊行されました。

通史編の編さん刊行を柱とする「県史編さん要綱」が制定され、新しい編さん体制が始まったのは、昭和四十八（一九七三）年度のことです〈第二期〉。原始古代中世史部会、近世史部会、近現代史部会が設けられ、通史編の根本となる資料篇編集が先に取り組まれました。資料収集では、約一〇〇軒の個人所蔵家を訪問し、『山形県史料所在目録』全八集にまとめ、新県庁移転時に生じた各課の廃棄文書を保存して「山形県旧県庁文書資料目録」をつくりました。通史編は第二次世界大戦終結までの歴史を五巻にまとめ、総目次・索引、年表、要覧、図説からなる別編を編集し、昭和六十三（一九八八）年度までに、合計で資料篇二一巻、本篇六巻、通史編五巻、別編四巻に達しました。「開かれた研究体制」をめざして山形県地域史研究協議会を発足させ（写真）、市町村史編さん担当者研究協議会を始めたのは、この時期です。

戦後の激動の歩みを現代編としてまとめることに着手したのは、平成元（一九八九）年度のことです〈第三期〉。政治・行政部会、産業・経済部会、社会・文教（文化）部会の三専門部会が設

けられ、他県に例を見ないほど新しい時期まで記述対象にして、現代史編さんのあり方を他に示すものとなりました。この時期、現代資料編三巻、通史編二巻、別編一巻を加え、平成十六（二〇〇四）年度までに合計四二巻の『山形県史』を刊行して、県史編さん事業が幕を閉じました。

三　山形県地域史研究協議会の設立

昭和四十年代、五十年代は、昭和の大合併の周年事業などから、市町村史編さんが盛んになりますが、編さん体制や資料収集などに課題を抱えていました。そうした中、第二期県史編さん事業においては、県史・市町村史・歴史研究団体・研究愛好者が一体となって交流をはかり研究を深めようという意図から、山形県地域史研究協議会を発足させることになります。

昭和四十八年度に、置賜・庄内・最北の三地域で、県史と市町村史などとの交流をめざした研究集会が開催されたのを皮切りに、翌年は、県立博物館で山形県史研究協議会が開かれ、その席上、村山市から「山形県地域史研究協議会（仮称）の設立について」という提案がなされました。提案は、次のように呼びかけています。

各市町村の歴史編さん事業は、相互に関連をもたないまま、それぞれ独自に進められているのが大方の実情ではないでしょうか。（略）何十年に一回というせっかくの歴史編さんの機会を有効に使い、市町村民のための「生きた歴史」書をつくりあげるためには、相互の交流が出発点として重要であることは否定できません。特に、どのような市町村をつくったらよいかという、編さんの理念については、それを実現するための具体的措置とともに充分議論し、意見の交換をはかるべきだと思います。（略）来年度からは、山形県地域史研究協議会（仮称）を設立し、県史のみならず、市町村史・歴史研究団体・研究者が一体となって、相互の交流をはかるとともに、地域社会の歴史や現状に関心をもつ人々、あるいは自ら「歴史」を担おうとする地域の人々との交流を深め、「こんな地域を」という、それぞれの考えを述べあい、当事者の方々にも考えてもらうという、そうした地域の歴史を考える広場をつくったらと思うのです。

こうして、昭和五十年七月十九日、天童市中央公民館で、山形県地域史研究協議会が産声をあげることになりました。設立総会の案内文には次のような背景が述べられています。

地域の歴史を掘りおこし、それを保存し、自ら叙述しようとする地域史編さんの試みは、地域の住民と研究者・行政担当者が一体となって、県内のすみずみにまで広がっております。それにつれて、地域史編さんのあり方、調査研究並びに史資料の保存などをめぐって、さまざまな問題が生まれ、それが「山形県地域史研究協議会」の設立の願いとなっておりました。

四　山形県地域史研究協議会の展開

第一回研究大会では、「地域史研究のすすめ方」という基調報告があり、第一分科会「市町村史編さんのすすめ方の問題」、第二分科会「地域史の調査・研究についての問題」、第三分科会「遺跡・史資料の発見と整理保存の問題」に分かれて、レポートに基づく討議がなされ、二日目は公開山形県史合同部会が開かれました。昭和五十一（一九七六）年の第二回研究大会では、二日目に史跡めぐりが加わり、この年度から、県立図書館から事業移管された「古文書取扱講習会」の開催と『山形県地域史研究協議会会報』発行が始まっています。ただし、会報第一号・第二号は投稿論文・記事中心で、研究大会の講演や研究発表の成果が載るようになるのは第三号からです。また、第五回からは分科会テーマが、第一分科会「原始・古代・中世を考える」、第二分科会「近世・近現代を考える」、第三分科会「地域史の新しい動向を考える」に変更され、近世以前と以後の二つの時代と民俗・歴史編さん・史資料調査保存等を扱う三つの分科会形式が、今日まで受け継がれることになります。

ところで、総会・研究大会の開催地に関しては、その設立趣旨や経緯を踏まえ、表1に示すように、県内各地区持ち回りという方式がとられました。県内一三市を中心に、村山・最上・置賜・庄内の四地区をわたるようにして、当該市町村に開催地実行委員会が設けられて来ました。第四十九回研

表１　総会・研究大会一覧

回	期　　日	開催地	会　　場	参加人数
1回	昭和50.7.19～20(1975)	天童市	天童市中央公民館	200名
2回	51.5.22～23	上山市	上山市市民会館	150名
3回	52.7. 2～ 3	東根市	東根市厚生会館	130名
4回	53.6. 3～ 4	山形市	山形市北部公民館	150名
5回	54.6.9	村山市	村山市民会館	130名
6回	55.5,31～6.1(1980)	米沢市	置賜総合文化センター	130名
7回	56.5.30～31	新庄市	新庄市中央公民館	120名
8回	57.5.29～30	鶴岡市	鶴岡市役所	150名
9回	58.6. 4～ 5	寒河江市	寒河江市中央公民館	200名
10回	59.6. 2～ 3	長井市	長井市民文化会館	150名
11回	60.6. 1～ 2(1985)	尾花沢市	尾花沢市民会館	200名
12回	61.6. 7～ 8	南陽市	南陽市役所	200名
13回	62.6.27～28	酒田市	酒田市総合文化センター	150名
14回	63.6.11～12	天童市	天童市市民文化会館	120名
15回	平成 1.9. 1～ 2	上山市	上山市市民会館	130名
16回	2.6. 2～ 3(1990)	東根市	東根地域職業訓練センクー	120名
17回	3.6.28～29	米沢市	置賜総合文化センター	120名
18回	4.7. 3～ 4	村山市	村山市民会館	120名
19回	5.7.17～18	長井市	置賜生涯学習プラザ	150名
20回	6.7. 1～ 2	酒田市	ホテルリッチ酒田	130名
21回	7.6.23～24(1995)	尾花沢市	尾花沢市文化体育施設サルナート	150名
22回	8.7.12～13	新庄市	新庄市民プラザ	200名
23回	9.7.11～12	鶴岡市	いこいの村庄内	130名
24回	10.6. 5～ 6	寒河江市	寒河江市文化センター	160名
25回	11.7. 2～ 3	東根市	花の湯ホテル	140名
26回	12.6.30～7.1(2000)	南陽市	むつみ荘	100名
27回	13.7.13～14	天童市	パラシオもがみ	130名
28回	14.6.28～29	新庄市	新庄市民プラザ	150名
29回	15.8.22～23	酒田市	東北公益文科大学	100名
30回	16.8.30～31	山形市	ウエルハートピア山形くろさわ	100名
31回	17.7. 4～ 5(2005)	尾花沢市	尾花沢市文化体育施設サルナート	100名
32回	18.7. 9～10	寒河江市	寒河江市文化センター	120名
33回	19.7. 8～ 9	飯豊町	飯豊町立飯豊中学校	120名
34回	20.7. 6～ 7	鶴岡市	出羽庄内国際村	150名
35回	21.7.12～13	上山市	上山市体育文化センター	130名
36回	22.7.25～26(2010)	天童市	天童市市民プラザ	85名
37回	23.7.10～11	米沢市	伝国の杜	100名
38回	24.7.15～16	村山市	村山市民会館	100名
39回	25.7. 7～ 8	庄内町	庄内町文化創造館（響ホール）	85名
40回	26.7. 6～ 7	新庄市	新庄市民プラザ	70名
41回	27.7.12～13(2015)	長井市	置賜生涯学習プラザ	120名
42回	28.6. 5～ 6	寒河江市	寒河江市文化センター	100名
43回	29.7. 2～ 3	遊佐町	遊佐町生涯学習センター	150名
44回	30.7. 1～ 2	尾花沢市	尾花沢市文化体育施設サルナート	120名
45回	令和 1.7. 7～ 8	山形市	山形市霞城公民館	120名
46回	3.7. 4(2021)	南陽市	南陽市赤湯公民館(えくぼプラザ)	70名
47回	4.7. 3～ 4	鶴岡市	東京第一ホテル鶴岡	75名
48回	5.7. 2～ 3	東根市	東根市職業訓練センター	80名
49回	6.6. 30～7.1	新庄市	新庄市民プラザ	80名

※　会場名は会誌「総会・研究大会の概要」に拠っています。参加人数は概数です。

究大会までの県内市町村における開催回数は、新庄市の五回を筆頭に、天童市・東根市・鶴岡市・寒河江市・尾花沢市が四回、上山市・山形市・村山市・米沢市・長井市・南陽市・酒田市が三回で、飯豊町・庄内町・遊佐町がそれぞれ一回になっています。県内市町村や地区が全面協力・連携して交流をはかり、県全体の研究を深めるといった山形県地域史研究協議会の会のあり方は、他にはあまり例を見ないもので、山形県の特色であり誇りとも言うべきものです。

研究大会における講演・研究発表と、会誌投稿論文・記事の内容を見てみます。内容を、五つの時代や、会の特色となる事項に分けて、件数を表したのが表２です。時代別では、研究大会の講演・研究発表でも、会誌の投稿論文でも、共に近世に関する内容が多いことがわかります。一方、初期の研究大会では、分科会テーマでもあった「地域史研究」、「歴史編さん」、「資料・文化財調査保存」に関する内容が多く見られます。とりわけ、「歴史編さん」は重要課題であり、会誌でも、「施設・研究会紹介」と共に、数多く取り上げられています。さまざまな時代や歴史的課題を取り上げて共有化を図ったこうした研究大会や会誌の活動は、山形県における地域史研究・歴史運動の発展に大きな役割を果たすことになりました。

半世紀にわたる山形県地域史研究協議会活動の中で見えて来た課題もあります。県史・市町村史編さん事業が刊行物発行後に事業終了となるところが多く、会員の高齢化も加わり、初期に個人・団体合わせて四〇〇を超えていた会員数は、現在、四割以下に減少しています。また、そのことが財源不足につながり、会誌では紙数に制約を受けて、第三十九号以降は、研究大会報告中心となり、投稿論文は見送りとなっています。さらに、県政方針の変更で、それまで県史編さん関係部署が担っていた事務局の仕事から県職員が抜けて、平成十九（二〇〇七）年度からは、常任理事中心の事務処理に大きく変わりました。県庁舎内に事務局を置き、県の関係機関から理事が加わることは変わりありませんが、方針変更の是非については、振り返りがないまま今日に至っています。

五　おわりに

県や市町村が地域の歴史を編さんするのは、住民に対して未来に生きる力を与える歴史を構築するという公の役割があるからです。その自治体史編さんを支える県民の力を結集する目的で設立された山形県地域史研究協議会は、山形県独特の形で半世紀を歩んで来ました。

歴史は常に書き換えられて行くものであり、県内でも長井市のように、一度終了した市町村史編さんを再開するところが増えています。自治体史編さんの業務は刊行物発行にとどまるものではありません。常設の編さん事業興しが各地で期待される中、山形県地域史研究協議会が果たす役割も、より大きなものになるのではと思っています。

表２　研究大会講演・研究発表並びに会誌投稿論文・記事の内容

（件）

	原始・古代	中世	近世	近代	現代	各論	民俗	地域史研究	歴史編さん	資料・文化財調査保存	施設・研究会紹介
研究大会	82	59	125	61	3	12	27	20	55	42	16
会誌	6	24	48	16	6	5	2	49	96	32	70
計	88	83	173	77	9	17	29	69	151	74	86

(1)特定分野について時代をまたいで扱ったものは、「各論」に入れています。

(2)会誌については、研究大会に重複するものは除き、文章の長短等にかかわらず目次掲載の論文・記事を一件としています。
大会概要・会則・役員名簿などの会務報告は含みません。

《特別寄稿》

伝えたい郷土の人

～天文学を学んだ二人の宗教者～

天童郷土研究会　会長

野口一雄

一　はじめに

山形船町村（現山形市）の農家に生をうけた義譽辨良（幼名林助　義譽上人）は寶臺院の住職（管主）となります。幕末、将軍慶喜が蟄居した寺院です。後年、故郷を想い、救民のため船町村に永久備蓄籾蔵を建て、また惜しみなく諸寺院へ寄進を行いました。仏教天文学に強い関心があり、天童市仏向寺境内に「満月の碑」を建立しています。

天球儀を制作した旧織田藩士渡邉綱雄の住まいは、「満月の碑」が建つ仏向寺近くにありました。「満月の碑」建立が、渡邉綱雄の天球儀の制作へとつながったのかも知れません。

幕末から明治初年、天文学にかかわった、船町村と天童生まれの二人の人物を紹介します。

二　「満月の碑」を建立した義譽辨良

『義誉上人略傳并捕遺逸 完』（以下、『略伝』）〔生家五代末今野雄太郎氏筆〕（注一）によれば、義譽辨良〔法諡 天蓮社賜紫義譽上人明阿無礙辨良大和尚〕は、寛政元年（一七八九）山形船町村今野松之助の二男として誕生。寛政十二年（一八〇〇）秋、山形長町称念寺教阿上人の下剃髪します。さらに文化二年（一八〇五）増上寺学寮に入り修学、学頭となりました。天保四年（一八三三）、幕命により下総大巌寺に住し、翌年二十六世の管主となりました。慶応二年（一八六六）職を辞し山内祥雲院に閑居し、明治五年（一八七二）に亡くなります。

天童の仏向寺に、仏教天文学を記した「満月の碑」が建っています。仏向寺は鎌倉時代、時衆一向派の祖、一向俊聖が天童市成生庄に開創したとの伝承があります。

山形天文同好会の鈴木静兒氏は、「満月の碑（天童市仏向寺）の碑文について」（注二）の中で、碑の表面〔文面最後に、嘉永四辛亥年八月　駿州米峯賜紫沙門義譽辨良題〕、裏面〔文面最後に、義譽上人詩中抄刻之　嘉永五壬子年三月〕について次のように解説しています。

〔碑が建てられた嘉永年間頃〕は一般の人々には地動説なども伝わっていたに違いない。（略）ところが仏教の人からみると、それは経典の教えに合わないので認められない。（略）そこで仏教側から西洋宇宙説に対する反駁が始まり、それは、ずっと明治時代まで続く。（略）この満月の碑はその流れに乗ったものであろう。（略）義誉辨良は自身、天文に興味があっただけに西洋説が広まっていくことを残念に思い、それを端的に表現し、仏の偉大さを称賛し庶民にもわからせようとしたのであろう。（略）太陽と月ならば日常生活でも、庶民信仰上も身近なものである。だから仏説擁護の論を張るには格好なものであったと思う。ただ表面・裏面刻まれた一年違いの内容に、天文学に対する見解の違いが認められることから、義譽辨良の意図ははたしてどう思ったのか疑問が残った。

義譽上人の生家今野家に、「満月の碑」に関係する書状が伝わります。「天童佛向寺に満月の碑を建立するにあたって（嘉永二年）」の書状には、①天童碑文の面取りについて、②月を詠じた詩・節分の詩・七夕の詩の三首について、③碑石裏面の彫について、④私の詩稿の中より抜き出し彫付ける理由、⑤天童碑建立時の寺関係、諸々合わせ一五〇両寄進、⑥金子を下す人を山形横町井筒屋へ差し向ける、などが綴られています。また、兄今野槙之助へ嘉永四年（一八五一）の書状には、「満月の碑」建立は最初、向谷寺（山形市中野）への機運があったが、仏教天文学に関心を高めてもらうためには、往来の多い天童の方が良いと考えたことなども記されています。

現当主誠一氏によれば、「碑は当初表面のみの記述であった。兄槙之助と書簡のやり取りで仏向寺の現況も考慮に入れ、裏面の文章が書き加えられた可能性がある。天文学に対する新たな見解からということではないかもしれない。」との事です。

『略伝』第七章「性格」の項に、「天文學は普門律師ニ就イテ其蘊奥ヲ窺ヒ（注三）寶台院ニ住セラレテカラモ同院境内ニ天文臺ヲ設ケテ天体ヲ観測セラレタサウテアル 中村師ニ請ウテ譲リ受ケタ 文政六癸未年六月朔日ノ日蝕ニ関スル計算書ハ上人ノ書カレテモノデ 又上人ノ調査ニ成ッタモノダラウト思フガ 尚他日ノ考証ヲ待ツコトトシヨウ」等とあります。上人遷化後、御箱金・遺品などは弁応（上人高弟、清水実相寺二十九世）に振り分けられました。その後、大正六年（一九一七）二月、中村弁康師により、上人の遺物が郷里の生家に譲渡され、その中に天文学に関する書物があったようです。誠一氏によれば、「現在は不明で写真のみが残っている。」とのことです。

写真１　「満月の碑」（天童市仏向寺境内）

『略伝』第八章「郷里ニ遺サレタル事跡、船町村鎮守大日堂立碑ニ附テ」には、上人の故郷への思いが次のように綴られています。

「上人が遠國ニアッテ一念故郷ノ追従ニ及ブ時先ヅ浮ビ出ヅルハ此ノ大日堂ノ森デアッタラウ（略）碑面刻スル所ノ詩明カニ之ヲ表シテ居ル

寶光臺上月玲瓏　起向郷天嘯北風
記得迎神暮春會　薫香一辨致微忠

駿州寶台住　賜紫義譽敬題

裏面ノ文并ニ句ハ延寿院〔義譽上人の兄槙之助〕ノ作詩デ 文字ハ東都ノ俳人琴和坊ノフデデアル　弘化二年（一八四五）三月二十八日」

（裏面の文章は省略、ルビは筆者）

写真２　「望郷の碑」
（山形市船町大日堂境内）

三　天球儀をつくった織田藩士渡邉綱雄

明治十一年（一八七八）七月出版『山形縣地誌提要 上巻』（注四）に、「渡邊〔綱雄〕氏、地球運轉ノ器械ヲ発揮シ」との記述があります。「地球運轉ノ器械」とは天球儀のことで、それは、「球面上に天球上の恒星・星座・赤道・黄道・時圏などを投影したもの」（注五）のことです。

渡邊綱雄がつくった天球儀の記事が『東京繪入新聞』（明治十年（一八七七）十二月四日）（注六）に、次のように載っています。その主なところを紹介します。

（前略）百折倦まずともいふべき忍耐力にて遂に新発明の器械を製造し大に名譽を顕ハしたる一美談ハ 山形縣下羽前國村山郡天童田鶴町の士族にて渡邊綱雄（三十九）といふハ 舊藩主織田家に仕へし頃より天文學に深く志して発明すること多く（略）器械によりて地球の運轉月の盈欠潮汐の満干其他の事迄一目に示教する様に工夫せんと日夜刻苦して漸其事を発明せり（以下略）

渡邊制作の天球儀が東京上野で開かれた第一回内国勧業博覧会へ出品されました。新聞記事を続けます。

（前略）内国勧業博覧會のお開きなるに付て縣令三島君ハ兼て此事を傳へ聞れて出品を申付られ製造資本として金貳百圓お下渡しになりしかバ（略）貳尺餘りの圓盤に太陽を中眞に

置き 廻せば地球ハ自然轉じて 太陽と二周する間に四時の變化晝夜の分ちを明かにし 月の盈欠潮汐の満干も一日にしてしるべし（略）假に地球運轉儀との名て出品（略）此度華紋賞牌を賜ハり、猶佛國萬國大博覧会へも出品すべしとの命を受けて、今一層美麗き製造に着手たる由（以下、略）

明治十二年（一八七九）五月十九日付『山形新聞』博覧会賞牌人名の欄に、県内受賞者名と作品が載っており、「地球略儀　天童渡邊綱雄」もあります。同新聞明治十一年十一月二十九日付に、「天童の渡邊綱雄が多年刻苦工夫されし地球畧圖は版權も許可なり近々の内摺出になるとのことなるが其發賣は同所の士族が結社してやると申ますから盛大な事であらうと同地より書送られたり」とあります。

第一回内国勧業博覧会は、明治十年八月二十一日～十一月三十日まで上野公園で開かれ、四五万人余の入場者がありました。西南戦争のなかでの開催であり、この勧業博覧会は、日本が参加した明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会を参考に、初代内務卿大久保利通が殖産興業推進のために推し進めたものでした。全国からの出品は鉱業及び冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸の大きく六部門に分かれ、優秀作には賞牌・褒状等が授与されました。天童織田藩家老吉田大八像を制作した生人形師神保平五郎は、山形済生館病院の人体模型を出品し、第一等賞となる龍文賞牌を受賞しています。大久保と親しい三島県令にとって、県内からの参加出品には、より力を入れる必要があったと思われます。新聞には天球儀を操作する渡邊が描かれています。

写真３　挿絵 天球儀を操作する渡邊綱雄（『東京繪入新聞』明治10年12月４日 国立国会図書館所蔵）

渡邊綱雄は、渡邊家戸籍によれば、天保十年（一八三九）天童町乙武田家に誕生します。文久元年（一八六一）、渡邊瀬蔵の養子として入籍。明治五年、旧織田藩士の娘と結婚。明治七年（一八七四）六月二十七日、『川部武定日記』に、「今朝佐藤氏へ参り候処、渡辺綱雄参り居り、今度九ケ村の村社祠掌被仰候」（注七）とあります。渡邊は明治八年（一八七五）、天童愛宕神社第二十七世社職（二十五代までは山形寶幢寺住職が別当）に就任します（注八）。履歴のところには、「天童田鶴町ノ人也、明治八年奉職（略）、明治十年五月県社昇級出願アリ、同十二年八月二十六日県社ニ進メラル、明治十二年迄奉職在職五カ年」（注九）とあります。

渡邊の天文学への関心は「満月の碑」との出会いからだったのでしょうか。神官となった渡邊の天文学は誰に学んだのでしょうか。さらなる資料が発掘されることを期待しています。

注　釈

一　「はしがき」に、「大正六年仲夏 上人の父より五代の後裔 雄太郎謹誌 三十四歳」とある。

二　『研究紀要』第二十一号 一九九〇　山形県立山形北高等学校

三　『略伝』第三章「江戸時代」に、「上人ノ天文学ノ師ハ普門律師デアルラシイ 本家ニハ松平冠山公（池田定常 一九六七―一八三三 江戸時代中期―後期の大名、明和四年十月三日生まれ）ヨリ寄セラレタ書簡ガ残ッテアル」とある。

四　荒井太四郎編輯　明治閣藏版。

五　『広辞苑 五版』による。

六　国立国会図書館より提供。

七　大木彬『のこしておきたい 天童地域の歴史資料 その三、川部家文書にみる幕末・明治期の動き』二〇一八

八　『天童市史編集資料』四十四号 一九八八

九　『天童市史編集資料』三十三号 一九八三

資料紹介　県史資料室所蔵

『山形縣史話』

編著　山形縣師範學校

ここで紹介する『山形縣史話』は、昭和八年（一九三三）九月二日に、当時の山形県師範学校が発行したもので、歴史科教室の美濃部道義が執筆を担当しました。本文は三百六十八頁で、発行は東京市日本橋の合資会社六盟館、発売所は山形市七日町の五十嵐太右衛門商店と記されています。

昭和初期は全国的に郷土教育が盛んに進められた時で、山形県師範学校も主導的立場としてその任に当たっていました。美濃部道義は校内に組織された郷土研究委員会の中心的な役割を担い、郷土資料の収集を担当していました。

巻頭にある美濃部の言葉によると、本書は山形県師範学校の生徒や県内の少年少女に、山形県史についてひと通りの知識を得させたいと思って作成した郷土史読本であることがわかります。執筆にあたっては、山形県師範学校長である野上源造から指導や励ましを受け、本県郷土史研究の権威であった五十嵐清峰や渡邊徳太郎から歴史上の人物や様々な出来事について解説内容の教示を受けたことがわかります。また、山形県郷土研究会（会長・三浦新七）からは貴重な写真図版の提供を受けています。

この本は小学校の上級児童から中学校の生徒にも読めるように、やさしい表現と文字を用いて書かれています。また、一つの話が終わる毎に参考文献が示してあり、研究の手引きにもなっています。目次を見ると石器時代から明治天皇の御巡幸まで年代順に二十五の話が続きます。注目されるものとしては「出羽の柵」「延澤銀山の採掘」「飽海西濱の防砂林」「最上徳内の蝦夷地探険」「松ヶ岡の開墾」などがあり、所々に写真図版が挿入されています。

本書は、昭和初期の師範学校において学習図書として使用されるだけでなく、県内各学校の授業教材や研究資料として利用されました。当時の郷土教育を知る上で貴重な文献となっています。

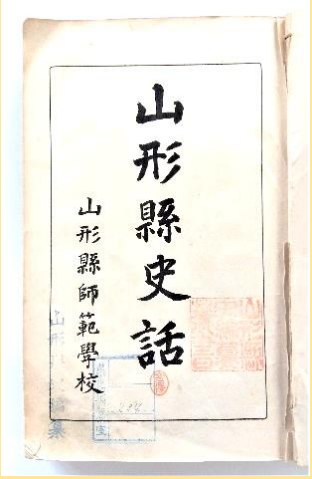

写真１『山形縣史話』中表紙
（県史資料室所蔵）

山形県地域史研究協議会への入会案内

山形県地域史研究協議会では、随時新会員を募集しています。

当会は、山形県の歴史研究の推進及び会員相互の交流を図ることを目的に、一九七五年に設立され、研究大会・総会、会誌の刊行、その他共催等の事業を行っています。年会費は三千円です。

皆様のご入会をお待ちしております。お気軽に事務局（県史資料室）までご連絡ください。

山形県
県史だより　第二十六号
令和七年三月六日発行
編集・発行
山形県総務部高等教育政策・学事文書課分室
県史資料室
〒九九一―八五〇一
寒河江市大字西根字石川西三五五
村山総合支庁西村山地域振興局
電　話　〇二三七―八三―一二一五
ＦＡＸ　〇二三七―八三―一二一六